第８回教師力アップセミナー

「授業者の風景」

正木孝昌　國學院大學栃木短期大学教授

－受動から能動への二段階授業－

２月１５日（土）小牧中学校で開催された「教師力アップセミナー」の本年度最終回，正木孝昌國學院大學栃木短期大学教授の「授業者の風景」という講演を聴いてきました。正木先生は筑波大学附属小学校教諭を３５年間も務められ，今は大学で教鞭を執られる傍ら，全国各地で「正木の算数授業」を公開してみえる愛称：ごりら先生と呼ばれる算数授業の神様の一人です。具体的な場面を交えながら，講演にちりばめられた数々の示唆の中から数点を紹介いたします。

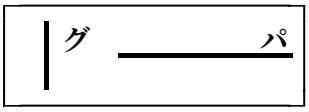
子どもが生きているとは

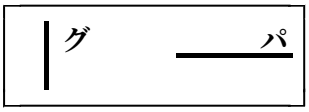
授業者として一番大切なことは,「目の前にいる子どもが生きているかどうかを見定める眼があるかどうか」である。子どもが生きているとは,「子どもが新しい課題をもって，何かに働きかけているかどうか」である。働きかけるとは能動である。よく「主体的」という言葉が使われるが，子どもが主体的になっているかどうかは見えない。しかし,「能動」は姿が見える。

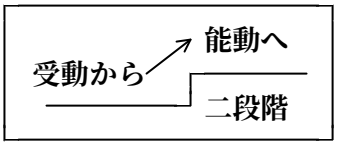
チャイムが鳴って入室してきた子どもは，すべて受動的である

チャイムが鳴って入室してきた子どもはすべて受動である。これを能動に変えていく。これが二段階授業である。

＜小２の例＞







どちらが蛇が長いか，グ，パで答えさせる。しかしこの時点では，子どもは動いていても，先生の命令によって動いているので受動である。しかし，次の図で，グ，パは半々になる。ここで,「今日の授業はこれまで」といって終わると，子どもは怒り出す。これが子どもが「能動」になった瞬間である。

受動から能動に変わるためには

子どもを「能動」に駆り立てるものには３つの方法がある。

①「漠然」を「明確」にさせたいという気持ちを起こさせる。
　子どもが漠然と持っている感覚をはっきりさせる働きかけをする。先の＜小２＞の例など。

②「きまりへの予感」を感じさせる。
　数あての決まりを見つけさせる。
　ヒントを小出しに出させながら，子どもの能動を引き出す。

２けたの整数で，元の数と１の位と１０の位を入れかえた数との差が，２７になる数のきまりを見つけさせる
　６３－３６＝２７
　５２－２５＝２７　・・・

③「自分でもできそう」と思わせる。
　新たな学習内容を，既知の学習内容に結びつけて，子どもにで「自分でもできそう」と思わせる。
　自分でもできそうだというもどかしさの中にいるとき，子どもは能動になれる。もどかしさを乗り越える経験のあるクラスなら，むしろこのもどかしさを喜べるようになる。

「授業における，（把握）→（自力解決）→（発表）→（練り上げ）は，手順であり，子どもの段階ではない。授業における子どもの様子の変化の段階は，（受動）から（能動）である。」

「教師の主体性とは，子どものしていることの中に自分の教えたいことを見つけること」そして,「それを見つけたときは，教師はそれを子どもに伝えること」など，正木先生が持っている，教えるということの基本的なお気持ちが，豊富な例の中の随所からくみ取ることができました。先生が書かれた本「授業者の風景」の副題である「椿の色は，椿色」のエピソード。「自分が小学生の時，椿の色は何色と聞かれ，赤に似ているけれども，赤ではない。迷ったあげくに椿色と答え嘲笑された。その思いを忘れないように，子ども達に接していきたい。」というお話は，ともすれば，自分の都合で授業を進めてしまいがちな教師が，忘れてはいけない一言であると思いました。

（文責　一宮市立西成中学校　長谷川濃里）